

須磨寺 句碑 歌碑 文学碑

1 歌碑 磯江朝子

受けし掌にもとまるがかりて
桜吹雪のなかなるひとりの
燦に充いゐる

2 句碑 『須磨紀行』 碑 良寛

すまでの むかしを問へば 山桜
よしやねむ すまのうらわの なみまくら

3 漢詩碑 陳舜臣

須磨寺有感 一 同 二

龍華橋畔弔平郎 源家鐵騎捲塵征
青葉笛声餘韻長 警報頻傳青葉營
底事海風吹到曉 記否興亡棊一局
吹殘蘭麝斷人腸 笛聲清雅白沙平

4 句碑 三好兵六

夫婦とはなちゃんと佳いもの向い風

5 文学碑 山本周五郎

表・「須磨は秋であつた…」
(処女作『須磨寺付近』から)
裏・「貧困と病氣と絶望に
沈んでゐる人たちのために…」

6 歌碑 大井広

12 句碑 尾崎放哉

こんな良い月をひとりで見て寝る

13 句碑 榎屋西月

ふる雨も 清水になるや 花のおく

14 歌碑 白崎弘皓

公達の 血のりを秘めて 七百年
水静かなり 須磨寺の池

15 句碑

木の葉句会 二十七句

16 句碑 小河六平

海の色 幾変わりにして 梅雨の須磨

17 句碑 竹本旭子

種時くや 畑暗らくして 旭影

18 音楽碑 (楽譜とキーボード付き)

大和田健樹作詞／田村虎蔵作曲

一ノ谷のいくさ破れ 討たれし平家の公達あわれ
暁寒き須磨の嵐に 聞こえしはこれか 青葉の笛

19 句碑 瀬川露城

4 句碑 三好兵六

夫婦とはなふんと佳いもの向い風

5 文学碑 山本周五郎

表・「須磨は秋であつた…」

(処女作『須磨寺付近』から)

裏・「貧困と病氣と絶望に

沈んでゐる人たちのために…」

6 歌碑 大井広

明滅のひかりをおくる灯台は
いづこにあらむ寂しき海原

7 句碑 正岡子規

暁や 白帆過ぎ行く 蚊帳の外

8 句碑 与謝蕪村

笛の音に 波もよりくる 須磨の秋

9 植桜記碑 神田松雲

花千母登 むかし稚木の さくら哉

10 句碑 伊丹三樹彦

くらやみになおも花散る 平家琵琶
甘酒に いま存命の 一本箸
長き夜の 楽器かたまり いて鳴らず
てのひらに 予言の重さ 寒卵
僕捨身 日暮の沖で さびさび浮く

11 歌碑 柳汀

○幾世を漕行海土の小舟さへ
静けき須磨の秋の夜の月

17 句碑 竹本旭子

種時くや 畑暗らくして 旭影

18 音楽碑 (楽譜とキーボード付き)

大和田健樹作詞／田村虎蔵作曲

一ノ谷のいくさ破れ 討たれし平家の公達あわれ
暁寒き須磨の嵐に 聞こえしはこれか 青葉の笛

19 句碑 瀬川露城

稻妻の ひと夜冷やして 須磨の海

20 句碑 五十嵐播水

香煙にふりこむ雪や初大師

21 歌碑 真鍋豊平

ひとすじに こころこめたる ことなれば
ちよのしらべも たえじとぞおもふ

22 句碑 摂津大掾旭叟史

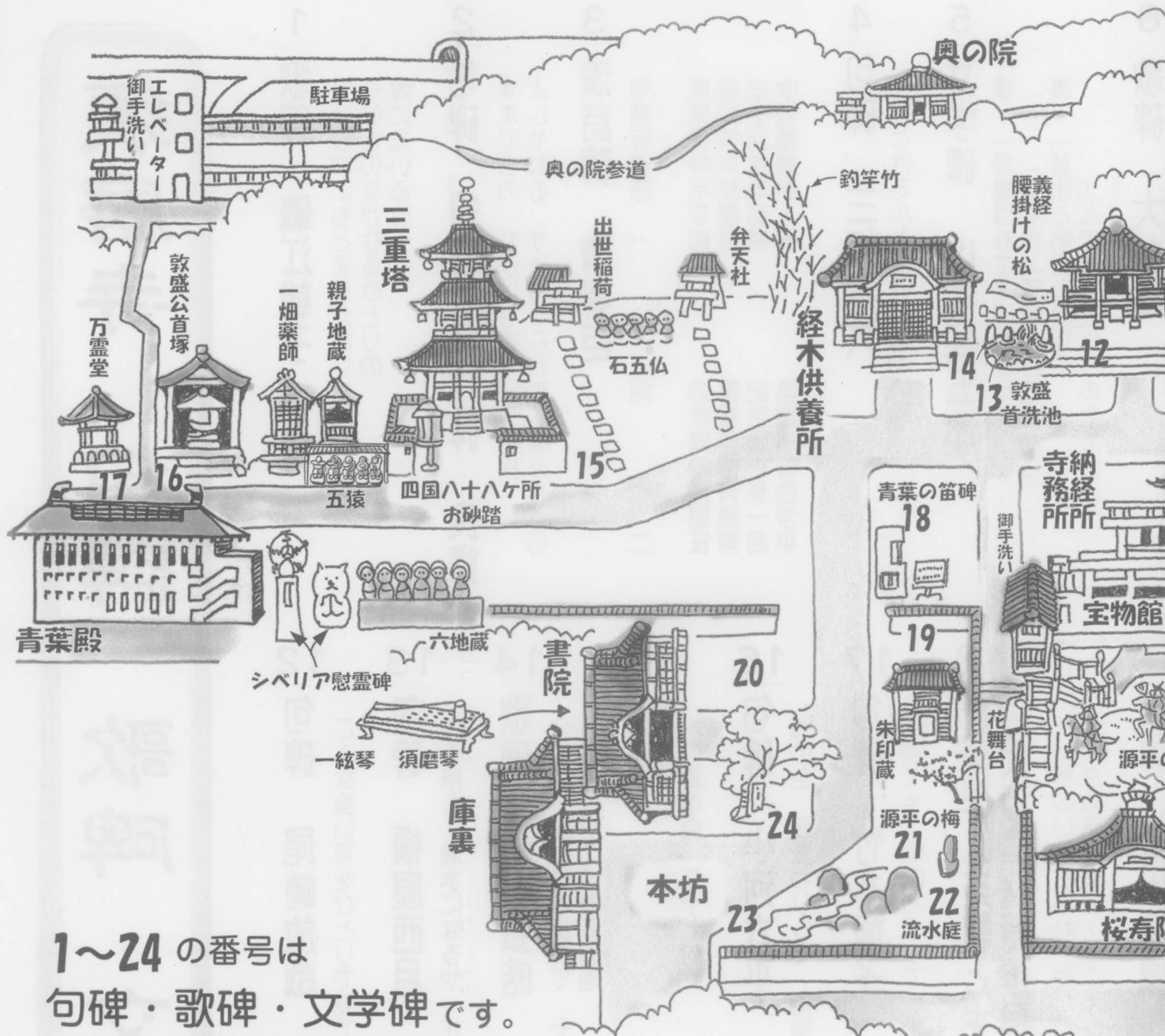
月すみて 松風すみて 須磨の浦

23 句碑 松尾芭蕉

須磨寺や ふかぬ笛きく 木下闇

24 墨跡碑 小池真禅

無心(山側) 淡如雲(海側)



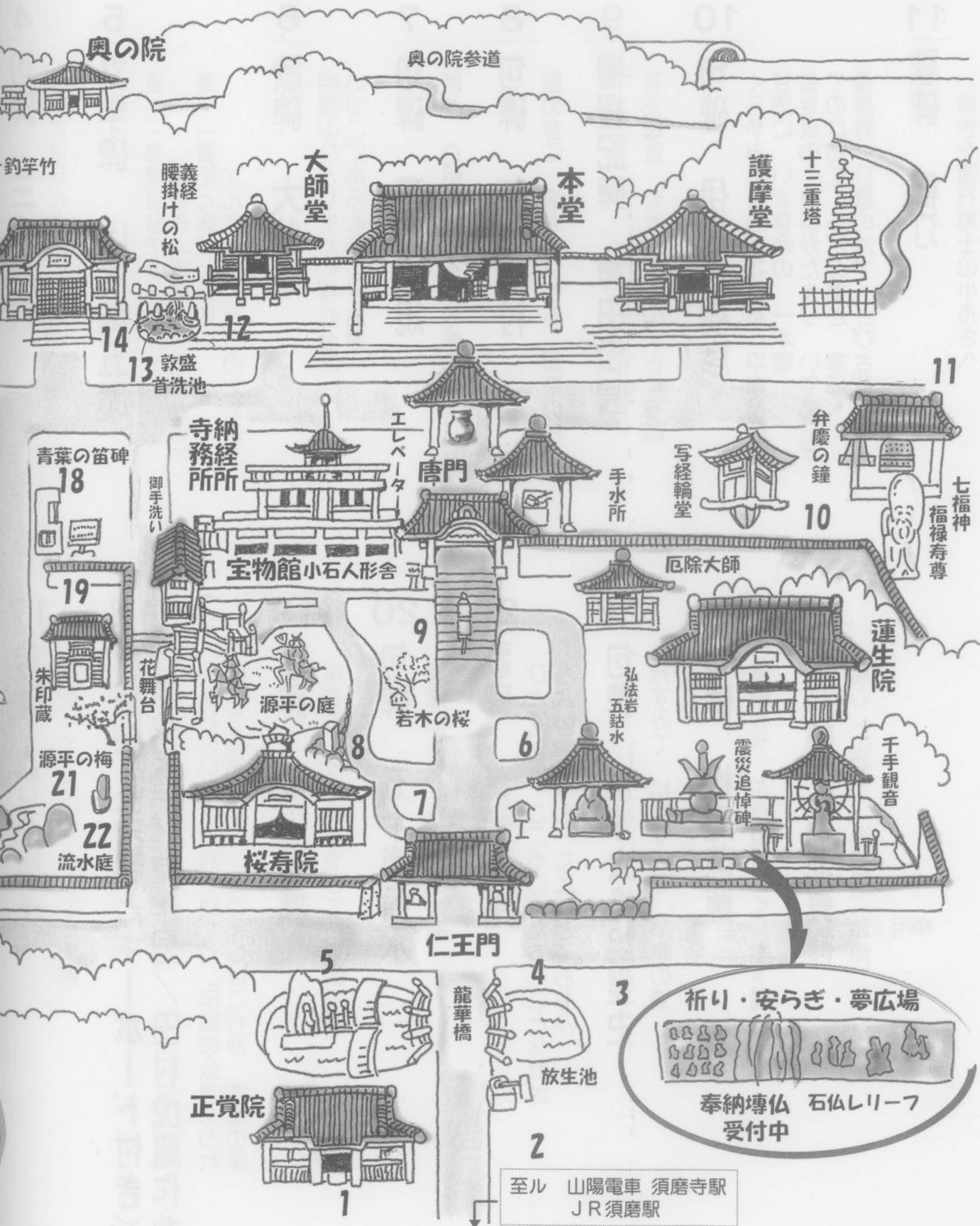
1~24 の番号は
句碑・歌碑・文学碑です。

*裏面に碑文一覧があります。

須磨寺散策マップ

SUMADERA PROMENARD MAP

正覚院



源平合戦と須磨寺

須磨寺の名前が全国的に知られるようになった大きな要因は、源平一の谷合戦の舞台になったことであります。一の谷合戦が行われた時、須磨寺は源氏の大将源義経の陣地であったと伝えられています。海側に陣を構えた平家に対し、山が海にせまった地形を利用し、義経は山から崖を馬で駆け下り逆落としの奇襲をかけます。不意を突かれた平家は、海へと逃げることにできず、源氏の歴史的な勝利となりました。

その戦の時、源氏の武将で熊谷直実という男がいました。直実はもともと平家の武将であり源氏に寝返った者でした。元からの源氏の武将に後れをとるまいと、手柄を誰よりも欲していました。しかし、一の谷合戦で直実が浜に着いた時、ほとんどの平氏は海に逃れた後でした。その中でただ一騎、波打ち際で逃げ遅れた立派な鎧を着た平家の武者を見つけます。そこで、直実は扇をかがげ「敵に後ろを見せるは卑怯なり。返せ返せ」と呼びかけます。するとその武者は振り返り、直実に一騎打ちを挑みます。しかし、あえなく倒され、直実が首を取ろうと兜を取ると、なんと直実の息子と同じ、年の頃十六、七歳と見える紅顔の美少年でした。「あなたの名前をお聞かせください」と直実が尋ねると、逆に「あなたはどなたですか」と聞き返され、「名乗るほどの者ではありませんが、熊谷直実と申します」と答えたところ、その若武者は「あなたに名乗るのはよしでしょう。あなたにとって私は十分な敵です。どなたかに私の首を見せれば、きっと私の名前を答えるでしょう。早く討ちなさい」と答えたそうです。直実はその潔さに胸が詰まりました。この若い命を討とうが討つまいが、戦の勝ち負けに関係はない。自身の手柄ほしきにこの若い命を落とさせることになってしまえば、自分の息子小次郎が少し怪我を負っただけでも心辛かった

のに、この若武者が討たれたことを、この方の父上が聞かれたならどれだけ嘆かれるだろうかと思いを巡らせました。助けたと思った直実が後ろを振り返ると、梶原景時ら味方の軍勢がすぐそこまで近づいてきます。もういよいよ逃げられまい。「同じ事なら、直実が手にかけて、後のご供養をお約束します」と泣きながら刀を執りました。討ち取った首を武者の鎧で包もうとすると、その腰に一本の笛が挿してあるのに気づきます。思えば今朝方、平家の陣から笛の綺麗な音色が聞こえてきて、源氏の武将は皆感動しました。その笛を見た時、「ああ、まさにあの笛を吹いておられた方はこの方だったのか。戦に笛をお持ちとは、なんと心の優しいお方であろう」と直実の心はいつそう締め付けられました。

陣地であった須磨寺に首と笛を持ち帰った直実は、大師堂前の池でその首を洗いました。そして、その前の大きな松の木の根方に腰掛ける義経が首実検を行いました。義経は、このお方は平清盛の甥の敦盛であるとおっしゃいました。享年十七歳でありました。持ち帰った笛を見て、涙を見せないものはいなかったといえます。平家物語で一番涙を誘う哀話である「敦盛最期」は、その後、日本人の心に深く染み入り、語り継がれてきました。それ以来、須磨寺には敦盛の首塚が祀られ、敦盛の菩提寺として広く知られるようになり、源平ゆかりのお寺として親しまれてきました。敦盛の愛用していた笛は「青葉の笛」と呼ばれ、今も須磨寺宝物館に展示されております。この笛を一度でいいから見てみたいと、古来より全国から多くの方がこのお寺を訪れています。松尾芭蕉や与謝蕪村、正岡子規などの歌人も当寺を訪れ、歌を詠んでいます。境内に点在する二十数基の句碑歌碑にそれらの歌を見ることができます。